

マイケル・シーゲル教授の御退職に寄せて

南山大学社会倫理研究所長 丸山雅夫

南山大学社会倫理研究所第一種研究所員として御活躍いただいたマイケル・シーゲル教授は、2015年3月をもって、定年により南山大学を退職されました。ここに、『社会と倫理』第30号を先生の退職記念号として、献呈させていただく次第です。一般に、退職記念論集は、退職前から編集に着手して、退職時に献呈するというのが通常のようなものです。今回、退職から半年以上を経過しての献呈になったのは、『社会と倫理』の発刊が30回目を迎え、記念すべき事態が重なったという事情によります。この事実にも、不思議な「縁」を感じているところです。二重の意味での記念号になったことから、シーゲル先生および社会倫理研究所に「縁」のある方々から、多くの力作をいただくことができました。それぞれにお忙しいなか、寄稿していただいた方々に心からお礼を申し上げます。

シーゲル先生は、略歴にありますように、カトリック神言修道会の司祭としてグローバルに活躍されるなか、1994年4月から南山大学非常勤講師、2000年4月からは社会倫理研究所非常勤研究員として勤務された後、2003年10月からは第一種研究所員（専任）として、11年6か月にわたり社会倫理研究所のためにお骨折りをいただきました。先生が着任された当時は、さまざまな要因が重なって社会倫理研究所の活動が相当に停滞していた時期であり、大学執行部の一員であった私も大きな心配をしておりました。それまで「平和」を軸としてグローバルな活動をされていた先生が着任してからは、文字通りの「社会倫理」を中心とした研究活動が力強く復活し、現在に至っております。もちろん、研究活動の活性化は、シーゲル先生おひとりの力によるものではなく、当時の研究所に関わった多くの人々の献身的な協力のもとに成し得たものです。しかし、その中で、極めて達者な日本語を存分に駆使して、明るくかつ精力的に活動を牽引された先生の存在は特筆すべきものです。こうした先生は、われわれにとって、「神父さん」と言うよりは、日々の苦楽を共にした「仲間」という存在でした。それだけに、当時も、そして今も、「もっと早くシーゲル先生が着任してくれていれば……」というのが、私の正直な気持ちです。

業績一覧から明らかなように、シーゲル先生の活動領域は多岐に渡っていますが、一貫して平和と環境問題が中心になっています。その一方で、『教会の社会教説綱要』の翻訳に見られるように、司祭職として極めて重要な仕事もされており、カトリック大学で社会倫理を追及する、まさに「うってつけ」の方でした。できれば、もっと長く専任として研究所の活動に関わっていただきたかったのですが、残念ながら、定年退職という事態は如何ともしがたいものです。幸いなことに、2015年4月からは、客員研究所員という、これまでよりは身軽な立場で協力していただいております。ただ、時折キャンパス内で先生を見かける私としては、先生の立場が変わったことを全く意識することなく、当然にこれまでと同じ協力がいただけるものと思ってしまうます。

シーゲル先生の御退職後、社会倫理研究所は、新たな陣容のもとで活動を継続し、多くの方々の協力のもとに、さらなる発展を目指してまいります。これは、『社会と倫理』が30号を迎えた節目の決意でもあります。シーゲル先生には、健康にご留意のうえ、今後の研究所の活動を見守るとともに、ご協力いただきますよう、お願いいたします。また、『社会と倫理』が30号を迎えるまでの間、さまざまな形で社会倫理研究所の活動を支えていただいた方々には、今後とも、これまでと変わらぬご協力とご支援を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

2015年11月1日